

## MPS研究会 2021年度活動報告

八 幡 雅 彦

### コロナウイルスを乗り越えて復活

2年前、2020年3月発行の『初等教育』第44号の中で、私は当時のMPS研究会の活動を振り返りながら「MPS研究会は現在1年生は3人しかいない。せっかくここまで成長してきたのだから、なんとか新年度は新入生の中から新しい部員を増やしてSmileyを存続させ、新入部員とともに新たな成長を促したい。いかにして多くの新入部員を勧誘するかは今後学生たちと一緒に知恵を絞って考える予定である」と記した。しかし現実には、知恵を絞って勧誘に勤めたものの、1年生の部員は入ってこなかった。MPS研究会は2009年にMarbleとしてスタートし、発足時の顧問教員が退職したのに伴い、2018年に私が顧問を引き継ぎSmileyとして再スタートを切ったが、「ついにこの3人で終わりか」という諦めの気持ちになった。そして2020年、有終のフィナーレを飾るべく3人は活動を始めたものの日本中がコロナウイルスに覆い尽くされ、度重なる活動休止を余儀なくされたうえに、この年最初で最後の公演となる予定だった12月の短大ウィンターフェスティバルも中止に追い込まれた。3人には本当に気の毒な思いをさせたが、実は彼女たちは「Smiley復活」の種をまいてくれていた。

2021年3月17日、全体の卒業式終了後、恒例のSmiley独自の卒業式を行い3人に「卒業証書」を手渡した。その席上で3人から「先生、これをどうぞ」と言われて受け取ったのが『みきちゃんのちょうせん』と題する1冊の絵本だった。聞くところによる、とウィンターフェ

スティバルに向けて台本を作り練習を続けていたが、中止になったので記念に絵本としてまとめたという。



2021年3月に卒業した学生たちが作った  
絵本『みきちゃんのちょうせん』

私は、心を打たれると同時に、「君たちの2年間のSmileyの経験はきっと将来に生きるよ」とはなむけの言葉を送った。

2021年4月、新入学生を迎え、3号館ホールで研究会紹介が行われた。私は半分諦めの気持ちだったが、形だけでも募集しようという思いでステージ上からSmileyの部員募集を呼びかけた。すると1名入ってきた。「ひょっとしたら他にも」という淡い気持ちを抱いて moodleを通して再度募集をかけたら5名が入ってきた。中には演劇経験者が複数いる。3人の卒業生が残した『みきちゃんのちょうせん』を見せ

たら「やろう」ということになった。ここにSmileyはコロナウイルスを乗り越えて復活した。

### 幻から現実へバージョンアップした「みきちゃんのちょうせん」ー

「みきちゃんのちょうせん」を幻から現実に変えるべく6人の練習が始まった。MPS研究会は、Smileyになってからは、門外漢である私は学生たちに練習の場を提供し、公演のアレンジを行うだけで、練習そのものは学生たちが独自に行い後輩に伝授してゆくという形を取ってきた。しかし「みきちゃんのちょうせん」に関しては台本が手元にあるだけでゼロからの出発である。しかも伝統的に用いてきた鉄骨の人形劇舞台装置も作り方を教わっていない。そうこうしているうちに公演依頼（7月23日水曜・日出町大神地区公民館「夏休み子ども教室」）が来た。そこで、学生たちは鉄骨舞台装置ができない代わりに、舞台そのものはテーブルで代用してSmileyの布で覆い、舞台の両袖は他の研究会のものを借用し、袖と袖を金属レールでつなぎ幕の開け閉めができるようにした。この見事な学生たちの知恵と工夫に私は感嘆した。

そして迎えた公演当日。学生たちは先輩が作った衣装、人形を用いて、音楽に乗って、子どもたちと一体になって「みきちゃんのちょうせん」を見事に演じきった。



7月23日、日出町大神地区公民館「夏休み子ども教室」での公演を終えて

公演終了後、卒業生たちに動画を送って知らせたらとても喜んでくれた。彼女たち自身が演じられなかったのは残念だろうが、彼女たちの台本のおかげでSmileyが存続できたことに私は心からの感謝の意を述べた。

その後、8月、9月とコロナウイルス第5波を経て10月半ばから活動を再開し、11月27日（土）には大分市のココカラりんくの地域交流事業に呼ばれ、約20名の幼児・児童の前で公演した。12月1日（水）には、昨年は中止になった短大フェスティバルが無事開催され、別府市内の5つの保育園、1つの幼稚園からやって来た170名の園児たちの前で公演を行った。さらに12月23日（木）には「劇団立見席プロデュースおんせん演劇祭 in ビーコンプラザ」に招かれ、鉄輪保育園児を含む約百名の観客に向けてさらにバージョンアップした「みきちゃんのちょうせん」を演じた。



11月27日、ココカラりんくでの公演

### 学生たちの振り返りー新たな挑戦への決意ー

#### ○上田理恵（1年Bクラス）

私は大学に入る前から研究会のDVDをみてスマイリーに入りたいとずっと思っていました。入学して研究会紹介になった時先輩が誰もいないことを知り正直入ろうか悩みました。でも、DVDで見たキラキラした姿をずっと憧れていたので入ることを決めました。

入ってからはほぼBクラスのメンバーでしたが、先輩たちがいなくても自分たちで案を出し

オリジナルを加えながら活動ができました。

「みきちゃんのちょうせん」ばかりしていましたが、たくさんの方に施設に行き公演することで子どもたちの反応を見たり、先生方から「よかったよ」や、「ありがとう」という言葉をもらったりとやっぱり私は子どもたちを笑顔にできるような保育士になりたいという気持ちが強くなりました。

今年度は主役をしたので来年度は裏方でもいかなと思っています。主役の様子を伺いながら自分も加わって一つの劇を完成させていく。そんな体験もしてみたいと思っています。主役は子どもたちを直接目の前にするからそれもそれで得られるものがありますが、裏方になってみないとわからない気持ちや子どもの声援、周りの方の動きを知ることができるのではないかなと思っています。

大学で演劇をすること自体少ないことなので研究会を通し演劇ができてよかったです。来年からはもしかしたら後輩が入ってくるかもしれないので、後輩も交えて楽しい研究会が作れるよう頑張っていきたいです。

#### ○高瀬郁佳（1年Bクラス）

1年間、コロナウイルスもあり思うように活動できず、上演できた作品は「みきちゃんのちょうせん」のみでした。加えて、先輩がおらず1年生のみでの活動で右も左もわからないような状態でのスタート。練習を模索しつつ公演に向けて取り組みました。わからないことだらけで不安でしたが、役の登場やペープサートの出し方などみんなで話しながら決めることでより子どもが見やすくすることができるようになりました。また、それぞれ役割を作り、全うすることで協力して一つの舞台を作る楽しさを感じることができました。私はペープサート担当で、キャラの邪魔をしないように注意したり、作中で違和感にならないように音楽に合わせて登場

することに気をつけながら活動しました。最初は手が見えてしまったりしてうまくいきませんでした。回数を重ねるごとに動かしやすくなり、見てくれた子どもや先生方に「よかったよ」と言ってもらえるようになりました。来年の目標は新しい台本に取り組み、みんなが他の役割を担えるようにすることです。せっかくだからいろんな技術を身につけて卒業できるようにしたいです。

#### ○内山莉佳子（1年Bクラス）

スマイリーで1年間活動してみても思ったのは授業やアルバイトと研究会の両立は中々難しいなということです。しかし得たことも大きかったです。例えばこのコロナ禍の中でも子どもを前に実際に活動をさせてもらえることや練習中も子どもに見せることを考えて話し合いをするので現場に出た時も役に立つことがあるなと思いました。立見席での公演は沢山の園児の前で発表をし、私は音響担当でしたが楽しかったです。どういう音楽や演出が子どもが一番喜んでくれるのか勉強になりました。色々良いこともありましたが、個人的には自分の忙しさが重なってかなり大変だったので、短期間でいいものを作ればという感じでした。今年の実習ももっとありますし、今の状況だとコロナの関係で沢山活動ができるというわけでもないと思うので、去年より1回1回の活動を大切にしていきたいです。そして去年とは違って、台本でも小道具でもなにか一つは自分たちで作って、私たちのスマイリーらしさを出せるようになればいいかなと思っています。

#### ○秋吉綾香（1年Bクラス）

今年のスマイリーでの活動は、公演回数は少なかったものの1つの演目を1年かけてやり遂げることができ、とても充実した活動でした。最初は子どもとの掛け合いのシーンや役を演じ

ることが上手いかず、手応えを感じにくかった公演もありました。しかし実習などで子どもへの理解を深めていくに連れて、話す声のトーンや掛け合いのシーンのテンポ感など、公演を重ねる毎に掴むことができましたと思います。来年は実習期間も長く今年以上に参加できるイベントは限られてくると思いますが、1年をかけて掴んだ感覚や経験を活かして、将来に活かすことを意識した活動をしていきたいと思っています。

### ○竹尾優香（1年Bクラス）

人形劇というので結構きつuitとと思っていましたが、研究会として入ってみて、「みきちゃんのちょうせん」のお母さん役を演じて、とても楽しく、まず、みきちゃんのちょうせんという題名に驚きました！そして今日まで「みきちゃんのちょうせん」しかしてこなくても、たくさんの試行錯誤をしながら子どもたちがどんな風に反応して、自分らはどのように呼びかけたらよいか、どうしたら反応してくれるかを考えて、それを実践した時は緊張したのもありましたが、自分たちが試行錯誤したことを反応してくれたのがとても嬉しかったです。そして、たくさんの保育園や児童クラブでの経験からたくさんのことを学び、みんなでやる楽しさを知りました。そして、これからもたくさんのやっていきたいと思っています。他のものにも挑戦として行きたいと思っています。これからも計画的に色々な人形劇を考えてたくさんの子供たちを楽しませたいです。

### ○溝部梨琴（1年Eクラス）

スマイリーの人形劇「みきちゃんのちょうせん」は、他の公演でも何度も演じていることもあり、最後の公演では今までの反省点を活かした人形劇になったのではないかなと感じました。訪れた保育園によって、問いかけやストーリーに対する返しがとても違っておもしろ

かったです。

反省点としては、子どもたちが「見えた～」と言っていた際は裏方役として少しヒヤッとしたので、来年度、または次の世代に交代する際には横をパーテーションで隠すなど、何かいい案を出したいなと思いました。また、動画で見返しても、見られているところがあったので対策を取りたいなと思いました。

良かったなという点は、二つあります。一つ目はスマイリー全体を通して、子どもたちの雰囲気や返事に合わせた動きができていないかなと感じました。二つ目は個人の動きとして裏方として、適切な場所に道具を出しているか、子どもたちの反応を通して、踊れているかなど考えて動くことができた点です。

この反省点を生かして、「みきちゃんのちょうせん」以外の人形劇も頑張ってみようと思っています。



12月23日、「劇団立見席プロデュース  
おんせん演劇祭 in ピーコンプラザ」にて

学生たちの振り返りからは、1年間充実した活動ができたことと、いくつかの反省点を見いだしたこと、そして新たな作品に挑戦したいという強い決意が感じられる。顧問教員である私の役割は、彼女たちとお互いアイデアを出し合いながら、彼女たちの夢の実現を手助けすることである。